

見つめ直した“集いの場”

よりあいつうしん

24号

よりあいつうしん課

〒814-0104

福岡市城南区別府7丁目9-22

骨身に染みだ。集いの崩壊。

令和四年一月後半、お年寄りや職員がコロナウイルスに集団感染したことで、ユニット広間の「集いの場」がなくなりました。お年寄り達は、朝から晩まで一人きりで過ごすことになりました。職員達も各部署が内線で連絡をとりあい、直接会話を交わすことがなくなり、もちろん外部の人はよりあいの森の中へ入れない状況でした。目には見えない人と人をつなぐ糸が切断された気分でした。約一カ月、孤立した状況は継続しました。きっと、日本中で同じように分断を余儀な



部屋に隔離となり、閑散としたわっしょいユニット

と心配し、共感してくれるお年寄りや職員がいます。時に痛い場所に触れて、さすってくれたりもします。当然のことながら、他の誰かの「痛い」に對してもその場の誰かが反応してくれま

集いの中には、声が出ない方や自ら動くことができない方もいます。しかし、ソワソワ気分のエミさんは、そんな方達の側にいるだけで気持ち落ち着くことがあります。また、笑い声や、一言出た言葉を集いの中の誰かが拾い、その場が盛り上がるのが度々あります。こんな風に、よりあいの森の集いの中では、知らず知らずのうちに、お年寄り同士、職員同士、またはお年寄りと職員同士がケアし、ケアされる場所となっているように思います。

今回、コロナの集団感染により、集うことができなくなりました。自分達がつくってきた「場」が起こしていた作用について見つめ直すことができませんでした。ただ単に集まっ

「腰の痛か。このポロ腰はどっかいつてくれんやろか」と顔をしかめれば、「大丈夫ね?」「私も痛いよ。腰痛つて嫌ね。」

と心配し、共感してくれるお年寄りや職員がいます。時に痛い場所に触れて、さすってくれたりもします。当然のことながら、他の誰かの「痛い」に對してもその場の誰かが反応してくれま

「やっぱり集いは必要です！」

コロナウイルスが蔓延し、ユニット広間は閑散としてしまいました。お年寄り達は自室で過ごすことになったためです。この間、みんなの体調を第一に考えた職員達の緊張状態は続きました。

体調を崩した方々は、時間と共に元気になり、大きな混乱もなかったように見えました。しかし、隔離され、一人で過ごしている様子はとても切なく見えました。また、職員達は、お年寄り達とゆっくり過ごすことができず、重苦しい気分でした。

いつもおしゃべりが止まらないヨウコさんも、この期間中は静かに過ごしていました。みんなでいる時は、おしゃべりが止まらなくなることがあります。あのマシンガントークは、周りの人が聞いていようがいまいがお構いなしと思っていました。しかし、今回の一人の時間では、パツパツと止まっていたのどろろと思えました。「ワンダホー！」

と嬉しそうに喜ぶことを含め、喜怒哀楽の感情の波が全くなくなり、ぼんやりと過ごす姿を見て寂しく感じました。

また、運よく感染を免れたお年寄りも自室で過ごすことになりました。現状を伝えると「わかった。部屋で過ごさんとね」と言って部屋に入るのですが、物忘れもあり、何度も出てこられます。テレビでパラリンピックの観戦をしており

「金メダルとつたよ！」と嬉しそうに報告してくれた時もありましたが、自分自身と一緒に喜ぶ余裕がありませんでした。そして、窓の外の人影を家族と間違えてしま

うことや、夜になると息子さんへ電話することが増えました。広間に「集う」ことができず、お年寄りや職員との交流が途絶え、寂しさや不安が大きくなったことからくる行動だったのではないかと振り返ります。自ら発信したことに反応がなく、楽しいことや嬉しいことの共有ができないう状況が続く、自分自身の存在を感じることができなくなっていたのでは無いでしょうか。そして、それはお年寄りだけではなく職員も同じでした。

コロナ蔓延時、私達職員は、お年寄りの健康を守ることを、起きて食べて飲んで、お手洗いへ行くことが最優先でした。黙々とそれだけに集中して働くことで、みんなの笑顔が消えていきました。お年寄り達だけではなく、職員達にとっても集いの場は、一緒に笑いあえる場であり、ホッと一息つける場であったのだと再確認することができました。

今回の経験は、よりあいが大切にしてきた「集う」ことを改めて考えるきっかけとなりました。これから、みんなで楽しい集いの場をつくり続けていこうと思います。

よりあいの森

久保 真梨子



現在のわっしょいユニット

よりあいの森
安永 周平

よりあい昔話 『真面目とは?』



むかしむかし、ほんの少しむかしの話。福岡のあるところに、第2宅老所よりあいというところがありませんか。

みんな「桃太郎」の話などをして盛り上がっていました。読書をしていました。N先生の話を聞いていたN先生。N先生のお仕事は内科の医師でした。少し耳が遠いこともあり、何の話で盛り上がるのかわかりません。私に笑顔で尋ねます。

N先生 「どうしたの？何の話で笑ってるんですか？」

私 「昔話ですよ、桃太郎の話とかご存知でしょうか？」

N先生 「そんな話知りません。何ですか？それは？」

私 「桃太郎ですよ！川から桃が流れてきて……」

N先生 「それがなんですか？」

私 「川から桃が流れてきて、おばあさんが家に帰って帰って、桃を切ったら中から桃太郎が出てきて……」

N先生 「ちよつとあなた、それはおかしいでしょう！」

N先生 「なんでですか！桃から人が出てくる？そんなばかな話、ありませんよ」

N先生 「人が桃から生まれてくるわけがないでしょう」

N先生 「まだね、あなた。サルから生まれたって言うなら、へえ〜と思う事もあるかもしれないが……桃からなんて人は生まれませんよ」

N先生 「そんな話ばかりは知りません」

N先生 「あなたね、もうちよつとちゃんとした話をしてもらわないと」

N先生 「ここはそんな場所じゃないですよ」

とあきれ顔。

真面目に話す方がおかしいのか、昔話だからとありえない話を話す方がおかしいのか。何がまともで何がおかしいのかわからなくなってしまうとき。

(おしまい)

第2宅老所よりあい

佐野 朋子

八重子さんの子連れ夜勤

アメリカで日本語の講師をされていた八重子さんは、明るくムードメーカー的な存在でした。しかし、アメリカで培った？歯に衣着せぬ物言いのために、他のお年寄りを怒らせてしまうこともありました。職員にも容赦はなく

「あんた太ってるわね？体重何キロ？」と面白がって職員達をからかっていた八重子さんがいるだけで、場がとてつもない雰囲気になりました。

八重子さんは一人暮らしをされていました。ある時、職員数名で自宅に伺う機会がありました。自宅に着き、インターホンを鳴らしてもなかなか出て来ません。預かっていた合鍵を使って中に入ると、ズボンが濡らし水浸しの中で倒れている八重子さんがいました。伺った日は休日です。私達が来なかつたら、寒い中濡れた床で一晩過ごしていたのでは？。この日はこのまま一人には出来ないかと判断し、よりあいへ泊まることにしました。車内で何度も「よりあいに来て良かった。あなた達がいてくれて本当に良かった」と言っていました。

八重子さんがよりあいに泊り始めた頃、夜勤を経験したかった私は、小学生の息子と一緒に勤務可能か相談しました。器の広い管理者は、快く快諾してくれて、私の『子連れ夜勤』がスタートしました。息子を

とても可愛がってくれました。教えるの様に。孫の様に。そして友達のように接してくれました。

一緒にタオルを畳み、ハンガーで洗いごっこをし、鬼ごっこをしました。息子が八重子さんのお布団に隠れて驚かせたり、縁側の干柿を三人でこっそり盗って食べたり、夏には花火もしました。ずっと一人暮らしだった八重子さんは、数十年ぶりの花火をとて楽しんでいました。あの時の笑顔は、今でも心に残っています。寒い日には

「僕ちゃんがかわいそう（寒そう）」と自分の布団を息子に掛けてくれます。朝は「まだ寝かせてあげなさい」と言ったそばから「まだ寝てるの！起きなさい！」と布団をはがします。自分が入浴や歯磨きが嫌いなのに、息子には「お風呂に入ってくださいなさい。歯磨きしないと口の中が虫だらけになるのよ！」

と言います。「テレビが近い！電磁波は身体に悪いのよ」と教育もしてくれました。寝る前には急に英語講師のスイッチが入り、『Good Night』の発音のレクチャーが始まります。息子も「グッドナイト」と応えますが、「ノーノー！グッナイイ！」と何度も繰り返します。オッケーをもらうまでは眠れません。

「日本ではお正月に子供へお年玉をあげるのよ。明けましておめでとう」とお正月にはお年玉をくれました。贅沢にカニ鍋とお雑煮を一緒に食べた帰り際、いつも通り「もう帰るの？明日は何時に来るの？」と縁側で私達親子が見えなくなる

まで見送ってくれました。その日が八重子さんと過ごした最後の日となりました。お正月明けから脑梗塞で入院し、病院で息を引き取りました。コロナ禍でお見舞いに行く事さえも出来ませんでした。

八重子さんと私達が過ごした時間は、お互いにとっても幸せな夜の連続だったと感じています。『子連れ夜勤』ではなかったら見る事ができない八重子さんの一面を見ることができた気がします。短い期間ではありましたが、かけがえのない思い出をくれた八重子さん、本当にありがとうございました。これから『子連れ夜勤』でしかできない時間を、お年寄り達とともに楽しんでいきたいです。

宅老所よりあい
柿原 涼佳



編集後記

今回のつうしん作成に当たり、私たちが考えたこと。それは「集うことの大切さ」。「人と関わることの大切さ」です。よりあいの森ではクラスタが發生し、宅老所でもコロナウイルスの影響により、少なからず人との関りが遮断されました。その結果、お年寄りや職員の笑い声が聞こえなくなり、日に日に消えていく笑顔に、ものすごく不安を感じました。よりあいに入職してからずっと言われ続けてきた「集う」との大切さを強く実感しました。

この経験から、今一度私たちが大切にしてきたことを見つめ直し、残された時間を幸せに暮らしていきけるように支援していきます。

お年寄りの皆さんが「幸齢者」だと感じられる様に。

宅老所よりあい
堀 正晴